

2022年7月3日(日)／説教者：神谷武宏

説教：^{バプテスマ}「洗礼の恵み」

聖書：ローマの信徒への手紙6：1～14

ヨハネ福音書3章にニコデモの話がある。ニコデモは、ファリサイ派に属しユダヤの議員であった。律法を熟知する者だった。その彼が、「ある夜」イエスのもとを訪ねた。するとイエスは問う。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と。ニコデモは「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか」と答える。そもそもニコデモは、何を尋ねにイエスのもとに来たのか？ 多分、律法を熟知し歩んでいても満たされないものがあつたのであろう。ニコデモの「もう一度母親の胎内に入って」という返答には、自分がこれまで努力し、自分を小さくし、謙虚に律法に生きてきた、しかしこれ以上、小さくなることはもう出来ないという意味がある。あくまでも自分自身がいつまでも生き続け、中心にいるという意味がある。でもイエスの言われる「新たに生まれなければ」という問いは、自分自身がキリストと共に死に、キリストと共に生きるということにある。

自分の努力で、「新たに生まれなければ」ならないということではなく、キリストに身をゆだね、キリストが十字架に死に復活して生きたように、キリストと共に死に、キリストと共に生きるということ。そのことは、私たちに与えられた「バプテスマの恵み」に表されている。

さらに「バプテスマの恵み」とは、「罪は、もはや、あなたがたを支配することはない」ということにある。ここで言う「罪」とはギリシア語の「ハマルティア」(単数)。ただ一つの罪ということ。「ハマルティア」の罪とは「的外れ」、「神を知らない」という罪。私たちがバプテスマの恵みに与かるとは、「神を知らない」という罪の中に居ることがなくなり、常に神の下、恵みの下に居ること。「従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい」(12, 13 節)。

神は、私たちが生きるようにバプテスマの恵みがあるのと同時に、「あなたがたの五体を(体を)不義のための道具として罪に任せてはなりません」すなわち、悪(戦争)の道具として罪に任せてはいけません…と、神は私たちに示している。一日も早い、世界各地での悲劇が、まことの平和へと向かうよう祈りたい。「バプテスマの恵み」は、人が神に愛されて生きるゆえの御業である。(神谷)